

# 『源氏物語』の和歌を読む（十二）

加藤 睦

一

「あはれをいかに知りてかなぐさめむあるや恋しき亡き  
や悲しき

おほつかなきこそ心憂けれ」とあれば、ほほ笑みて、さまざま  
まもなく思ひよりのたまふ、似げなの亡きがよそへや、と  
思す。いとく、ことなしびに

「いづれとか分きてながめん消えかへる露も草葉の上と見  
ぬ世を

おほかたにこそ悲しけれ」と書いたまへり。  
(夕霧卷<sup>①</sup>)

妻の雲居雁から心変わりを疑う歌を贈られ、それに夕霧が返し  
た「いづれとか…」詠について、諸注は次の二点において共通の  
理解を示している。

・「いづれとか」と、雲居雁詠の「あるや恋しき亡きや悲しき」  
の間に、呼応関係を認める。

・一首を、「雲居雁が探りを入れてきたのに対して、一般論で  
はぐらか」（新編全集・頭注）した歌と理解する。  
こうした理解の方向性については、特に異論はない。ただし、  
前者の呼応関係については、少し立ち入って確認しておきたいこ  
とがある。

雲居雁詠の「あるや恋しき亡きや悲しき」には、諸注の指摘す  
るように、「生きている落葉宮が恋しいのか、亡くなった御息所  
のことが悲しいのか」という含意があり、それを露骨に問うので  
はなく、一般的な表現で示している。

諸注が見出している「呼応」は、この具体的な含意にまで及ぶ  
ものなのか否かが、はっきりしないところがある。

・どちら（落葉宮と御息所）と言って、特に思いつめて悲しん  
でいようか、悲しんでいるのではない。……（大系）

・「いづれ」の語釈」どちら。雲居の雁の和歌の「あるや恋し  
き亡きや悲しき」を受け、落葉の宮と故御息所を指す。

（鑑賞と基礎知識）

右の解釈では、含意を踏まえての呼応と理解していることが

はつきり示されている。玉上評釈が鑑賞欄で、次のように述べるのも同様の理解だろう。

「いづれとか」の歌は、意味がわかりにくい。昔からさまざまに考えられているが、「おほかたにこそ悲しけれ」とあるところからすれば、一般的な世のはかなさをいっただものであることは明らかである。御息所とか宮といった特定の人について思いに沈んでいるのではない。いずれも皆、悲しい人間の運命だ、そういう一般的な世の無常が悲しいのだ、といったところであろう。

これに対し、次のような現代語訳の場合は、含意を踏まえての呼応と考えているのか否かが、判然としない。

・何がどう悲しいといふのでもない。……

(全書)

・特に誰のことというわけで悲しみに沈んでいるわけでもありません、……

(集成)

・そのどちらにと区別しても思いに沈んでいるわけではない

(新大系)

・そのどちらのためにとりわけ物思いに沈んでいるわけでもないのです。

(新編全集)

強いて言えば、集成の「特に誰のことと…」、新大系、新編全集の「その…」という解釈のしかたは、いったん含意を受けとめたくえてそれをはぐらかしていると理解しているような印象があるが、確かなところはわからない。

これは、決してそれぞれの現代語訳の不備などではなく、贈歌の一般的な表現をそのまま「いづれとか」と受けている、夕霧の返歌そのものの曖昧さに起因するものと考えられる。

ところで語り手は、この歌について、「ことなしびに…」と言葉を添えている。「ことなしび」は「何でもない様子をすること。なにげないふりをする」との意を表し（日本国語大辞典 第二版）、当該歌について、読者を次のような了解に誘導する働きを有するであろう。すなわち、夕霧は返歌をするにあたって、雲居雁詠の下句が匂わせている含意を解さなかったふりをし、「生きている人々が恋しいのか、亡くなった人々のことが悲しいのか」と問いかけられたものとして、その問いに対して大方の無常を嘆く歌を詠んだのだ、という了解である。

玉上評釈は、鑑賞欄において、次のように当該歌について述べている。

……それは一見、妻の問うた「あるや恋しき」も否定したようにみえるが、同時に「なきや悲しき」でもないのだよ、とこちらも否定したことになり、結局は宮の事も、お気の毒におかわいそうに、いとおしく思っていないでもないのだ、という含みを持って来る。心もとなく怪しげな答え方である。

ここに記された印象は、夕霧詠が雲居雁詠の含意に応じていると読み取った場合に、確かに当てはまるものである。けれども夕霧は、その問いを理解できなかったかのように返歌した。そのことは「ことなしびに」という言葉が添えられていることよって初めて確実に了解される。私たちも物語の読者と同様に、その誘導に従って読み進めるのが妥当ということになる。

ところで、「ことなしびに」という言葉が添えられた歌は、『源氏物語』にも一例存在する。それは、総角巻で大君が詠じた、山姫の染むる心は分かねどもうつろふ方や深きなるらん

である。この歌は、薫から「秋のけしきも知らず顔に、青き枝の、片枝いと濃くもみぢたる」枝とともに贈られた、

おなじ枝を分きてそめける山姫にづれか深き色とはばや  
という歌への返歌である。「ことなしびに」は、「山姫の…」詠の直後に次のように記される。

ことなしびに書きたまへるが、をかしく見えければ、なほえ  
怨じはつまじくおぼゆ。

この贈答歌については、すでに拙稿<sup>(2)</sup>において以下のことを論述した。

・従来、薫からの贈歌について、紅葉が薫が思い染めた大君を寓意し、青いまの葉が中君を寓意していると考えられ、また、薫は紅葉の方を「深き色」と思っていると理解されているが、正しくは、紅葉が中君に移ろう心を、青いまの葉が大君への変わらぬ心を、それぞれ寓意しており、薫は青いまの葉を「深き色」と思っていると読むべきである<sup>(3)</sup>。

・大君は、薫の思いを理解したが、それをはぐらかし、移ろう葉のほうが高い色なのでしょうと、送られた枝そのものについて、の当たり前のことを、「ことなしびに」返歌した。

「山姫の…」詠について諸注は、薫の中君に対する思いを暗示する回答を示した歌という理解に基づき、次のような解釈を行っている。

山姫が片方の枝だけを染め分けた気持はわからぬが、色移つて紅葉した方に深い心を寄せているのだらう、の意。「うつろふ」は、色変る、心移る、の両意。薫の心をしめているのは、心移った中君の方だとする。

(新大系)

この読み取りについては、大君自身が、薫が中の君に対して何もしなかったことを、同じ部屋奥に身を隠してよく承知していたのに、その薫の思いを無視して、「薫の心をしめているのは、心移った中君の方だとする」返歌を詠むだろうかという疑問がわく。けれども、その一方で、女が男からの歌に対してことさらに冷たく返歌することは、一つの作法であるから、諸注のように読み解くのもあながち誤りとも言い切れない。

そのように解釈に幅のある「山姫の…」詠について、ここでも「ことなしびに」という言葉が、読者の理解を誘導していると考えられる。この語が添えられることによって、大君が薫の贈歌をその表層に示された葉の色の深さについての問いに限定してとりなし、素朴に即物的に答えたのだということが、はっきり読者に伝わるのである。

## 二

物語作中歌について、読者の読みを誘導する言葉としては、「ことなしびに」のほかに、「公事にぞ聞こえなす」(夕顔巻)とか、「あさはかに聞こえなしたまへば」(須磨巻)、「しらずよみによみける」(伊勢物語・十八段)などが思い浮かぶ。このような言葉が歌に添えてあれば、その言葉が読者を導いて行く方向を推測して、私たちも妥当な理解への道筋を辿ることができる。けれども、そのような言葉がないにも関わらず、歌の理解に幅があつて、含意があるのかないのかなど、微妙な判断をしなくてはならない場合は少なくないように思われる。

以下、複数の事例について、そのことを考えてみたい。

君は、誰ともえ見分きたまはで、我と知られじとぬき足に歩  
みのきたまふに、ふと寄りて、「ふり棄てさせたまへるつら  
さに、御送り仕うまつりつるは。

もろともに大内山は出でつれど入る方見せぬいさよひの  
月」

と恨むるもねたけれど、この君と見たまふに、すこしをかし  
うなりぬ。「人の思ひよらぬことよ」と憎む憎む、

里分かぬかげをば見れど行く月のいるさの山を誰かたづ  
ぬる (末摘花巻)

いたずら心で源氏をつけてきた頭中将に対して、源氏が詠んだ  
「里分かぬ…」詠について、諸注の理解はおおむね一致している。  
それは次に例示するような解釈である。

・すべての場所を照らして、あの里この里と区別をしない月の  
光を見はするけれど、その月がはいっていく山を尋ねる人な  
どはいませんよ。すなわち、あちらこちらと浮気をしてまわ  
る事は知ってしても、その行く先まで追及する人があるもの  
か。私ならそんなことはしない、の意。「里」は男が通って  
行く女の家を言った。……

(玉上評釈)

・どの里をも、あまねく照らす月の光は仰いでも、大空を渡っ  
てゆく月が入ってゆく山まで誰が尋ねてゆくものがあるう。  
あちこちの女の所に忍んでゆくのを知っていても、あとをつ  
ける者があるものか。「里」は、「大内山」(宮中) に対して

用い、女の家のこと。

(集成)

このように諸注は、上の句、下の句の双方から寓意を読み取っ  
ている。そのうち、下の句の読解は、「人の思ひよらぬことよ」  
と憎む憎む」詠んだ歌、すなわち頭中将の酔狂な行為に文句を  
言った歌の内容として適正なものと判断される。これに対し、上  
の句については、常陸宮邸まで後をつけられながら、源氏が自分  
から進んで「あちらこちらと浮気をしてまわる」(玉上評釈)「あ  
ちこちの女の所に忍んでゆく」(集成)などと、自分の不名誉に  
なることを口にするのだろうか、ふつうそんなことは言わないだ  
ろうにと、大いに疑問を感じる。

・里わかぬ月の光をばみれども、明がたの入さの山までを尋ね  
る人もなきに、思もよらぬ事にくむ心をそへたり。

(花鳥余情)

・面白歌也。月をばなべてたれもめづれども、いるかたまでを  
たづね行人はなき物をと也。 (細流抄)

・頭中将のかかる御ありきまでしたへるを思よせ給へり。

(万水一露・碩)

右に引用した旧注の解釈は、下の句の意味に重点を置いたもの  
とみられ、上の句が何を寓意しているのかといったことについて  
は、特に考慮していないようである。

現代の注釈の中では、鑑賞と基礎知識が、次に引くように、下  
の句にのみ寓意を見出す解釈を行っている。

・この里だろうと分け隔てせずに照らす月を見ることはある  
けれど、その月の入る山を誰が探すでしょうか。尾行すると  
は、あまりにひどすぎます。

親しい頭中將に対して「すこしをかしうなりぬ」という気持ちから文句を言った当該歌にふさわしいのは、このようなおらかな解釈であろう。諸注が上の句を放置せず、そこに遡って寓意を読み取ろうとするのは、律儀すぎるのではないか。

・ おほぬさのひくてあまたになりぬればおもへどえこそたのまざりけれ

(古今集・恋四・七〇六・よみ人しらず・「ある女の、なりひらの朝臣をとことさだめずありきすとおもひて、よみてつかはしける」)

・ ほととぎす汝がなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから

・ 玉かづらはふ木あまたになりぬれば絶えぬ心のうれしげなもの  
(伊勢物語・四三段・八〇)

・ ほととぎすいづれのさを見ざりけむあまたふるすときけばたのまず  
(伊勢物語・一一八段・二〇〇)

右の四首のそれぞれの傍線部は、男あるいは女の色好みの比喻となつてゐる。当該歌の「里分かず照らす月」は確かにこれに似通つてゐる面がある。けれども、この四首はそれぞれ他者の好ましくない行為を非難した歌であることに注意したい。<sup>(4)</sup>このことから見ても、諸注が「里分かず照らす月」から詠者自身の好色なふるまいを読み取つてゐることの不自然さが浮き彫りになるだろう。

そもそも当該歌においては、「里分かず照らす月」を眺めることは、誰もがふつうに行うこととして示されてゐることに注意しよう。源氏が歌の直前に口にしてゐる、「人の思ひよらぬこと」に

当てはまるのは、「入る月のいるさの山」を尋ねて行くことであり、これが頭中將の物好きな行為の比喻となつて非難されてゐるのである。

当該歌の読解にあたつては、月とはふつうどのように眺めるべきなのかを詠んだ歌として、一首をまず理解し、ついで、「人の思ひよらぬことよ」と憎む憎む」という叙述に照応する下の句の含意を了解すればよい。読者がそこからさらに上の句に戻つて、そこに何が寓意されてゐるのかなどと、氣を回す必要はない。

### 三

「なほ名のりしたまへ。いかでか聞こゆべき。かうてやみなむとは、ざりとも思されじ」とのたまへば、

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ

と言ふさま、艶になまめきたり。「ことわりや。聞こえ違へたるもじかな」とて、

「いづれぞと露のやどりをわかむまに小篠が原に風もこそ吹け

わづらはしく思ふことならずは、何かつつまむ。もし、すかいたまふか」とも言ひあへず、人々起き騒ぎ、上の御局に参りちがふ気色どもしげく迷へば、いとわりなくて、扇ばかりをしるしに取りかへて出でたまひぬ。  
(花宴卷)

朧月夜との後朝の別れにおいて源氏が詠んだ返歌「いづれぞと

「」について、諸注は次に例示するように、一致して「風」を比喻と認定し、その内容としては世間の噂、あるいは妨害というふうに理解している。<sup>⑤</sup>

・あなたの身の上を知ろうと尋ねている間に、世間に噂が立つて二人の間がだめにならぬか心配です。  
(玉上評釈)

・あなたのお住居はどこなのかと探している間に（あなたは誰なのかと尋ねている間に）、世間に噂が立つて二人の仲がだめにならぬかと心配したのです。……「風」は「露」を吹き散らすので、二人の仲を割くものに喩える。  
(集成)

・どれが露のようにほかないあなたの宿かと探している間に、小笹の原に風が吹いて二人の仲も絶えてしまつては大変だ、の意。「露のやどり」は女の住まいを、「小笹が原に風」は世間の噂、妨害をさす。  
(新大系)

たしかに、「風」は世間の噂、あるいは妨害などの比喻となりうる言葉であろう。けれども、そのような含意を考える前に、この言葉が一首の中で意味することがらを、表現に即してそのまま読み取るのが先であろう。

この歌は一見してわかるように無常観に基づいて表現が組み立てられており、「風」は、無常の世を象徴する「露のやどり」と連動してその露を吹き払うものとして詠まれている。これをそのまま読み取れば、「めざす露がどこに宿っているのかと小笹の原をかき分けて探している間に風が吹いて露を落としてしまうかもしれない」の意となる。ここで「露」は朧月夜（ならびに多くの人々）の比喻であるから、風が吹くということは朧月夜の死を意味することになるだろう。けれどもそれは不吉だ、ということでは

「風」からもつと現実的で無難な意味、すなわち噂、妨害などの意味が読み取られているものと思われる。

ところで、当該歌が無常観をただよわせているのは、朧月夜が贈歌において、自らの死や「草の原」（墓）を大げさに詠みこんだを受けてのものであるが、彼女がそれを口ずさんだ様子は、「艶になまめきたり」と記されていて、不吉な印象を与えず、むしろ優雅な趣を伴っていたことが読み取れる。

これを受けて、源氏は、「ことわりや。聞こえ違へたるもじかな」と冗談めかした言葉をかけて、当該歌を返している。

このような流れから見ても、「いづれぞ」と詠もそこに示された世の無常は決して不吉なものではなく、贈歌の発想と表現にそのまま寄り添いながら、朧月夜の問いかけに優雅に気安く答えたものと読むのがよいだろう。

・桜花けふよく見てむくれ竹のひとよのほどにちりもこそすれ  
(後撰集・春中・五四・坂上是則・「前栽に竹のなかにさくらのさきたるを見て」)

・ゆめのごとなどかよるしも君を見むくるまつまもさだめなきよを  
(拾遺集・恋二・七三四・ただみ・「天曆御時歌合に」)  
・ちらぬまにいまひとたびもみてしかなはなにさきだつ身ともこそなれ

(詞花集・雑上・二七七・天台座主源心・「人のもとにまかりたりけるに、桜花おもしろくさきて待りければ、あしたにあるじのもとへいひつかはしける」)

・こよひしもきかはやまむほととぎすのちになくともさだめなきよを



（義孝集・五八・「五月五日、ほととぎすのこゑせずとて」）  
・見捨ててはかへるべしやは風やまぬ峰の紅葉ののどけからぬを

（公任集・一四二・「ながたにに入り給ひて後、中納言のまゐり給ひてかへり給ふとて、なが谷より」）

これらの歌を通覧すると、無常そのものか、あるいははかない変化の迅速な到来を予測して見せることは、決して不吉な意味や深刻な意味を帯びることはなく、何かをすぐに実現させたいという願望を強調するように働いていることがわかるだろう。

当該歌もまた、「小篠が原に風もこそ吹け」と世の無常をほのめかすことによつて、「あなたを探すつもりはあるのだが、あなたも言うように無常の世では何があるかわからないから、とにかく今すぐ名乗ってほしい」と返したものと、一首を理解するのが自然である。源氏が当該歌の後に、「別に面倒なことはないだろうに」と言わんばかりの呑気な言葉を朧月夜にかけていることも、右に記した読解に適合する。

#### 四

九重にかすみへだてば梅の花ただかばかりも匂ひこじとや

ことなることなき言なれども、御ありさまけはひを見たてまつるほどは、をかしくもやありけん。「野をなつかしみ明かいつべき夜を、惜しむべかめる人も、身をつみて心苦しうなむ。いかでか聞こゆべき」と思し悩むも、いとかたじけなし

と見たてまつる。

かばかりは風にもつてよ花の枝に立ちならぶべきにほひなくとも

さすがにかけ離れぬけはひを、あはれと思しつづ、かへり見がちにて渡らせたまひぬ。  
（真木柱巻）

冷泉帝のもとに尚侍として出仕した玉鬘が、夫髭黒の催促もあつて退出する際に、帝に贈った「かばかりは……」詠について、諸注は玉鬘の謙遜の思いを一致して次のように読み取っている。

・女御更衣方に比較される程のものではありませんが、これ位のお便りは何かの折に頂きたうございます。（全書）

・ほのかなお便りだけは風にもおことづけ下さいます、ほかの後宮の方々の美しさに肩を並べるべくもない私ではございます。（集成）

・香りだけは風の便りにおことづけくださいまし。ほかの花の枝のような御方々の美しさに立ち並ぶことができるような私ではございませんが。（新編全集）

右に例示したように、ここで読み取られている謙遜の思いとは、私は「女御更衣方」「ほかの後宮の方々」の美しさに立ち並ぶことなどできない、というものである。

そこでは、「花の枝」は、冷泉帝をとりまく美しい女性たちの比喩として理解されている。けれども、このような比喩の理解は、冷泉帝から贈られた「九重に……」詠への返歌の解釈としては問題があるだろう。

贈歌で冷泉帝は、玉鬘を「にほひ」豊かな梅の花によそえてい

る。このように、自分が美しい花によそえられた時は、そのことに対して、恐縮し、謙遜するのが通例であろう。

優曇華の花待ち得たる心地して深山桜に目こそうつらね  
と聞こえたまへば、ほほ笑みて、「時ありて一たび聞くなる  
はかたかなるものを」とのたまふ。

右の場面で、源氏は北山の僧都から「優曇華の花」によそえられたのを受けて「時ありて」と述べてそんなことはないでしょうと謙遜している。

それもとけさひらけたる初花におとらぬ君がにほひとぞ見る  
（頭中将）

時ならでけさ咲く花は夏の雨にしをれにけらしにほふほどな  
く（光源氏）

この贈答で、頭中将は源氏を初花に匹敵する美しさと称え、源氏がそれに対して、自らを季節はずれのしおれた花と卑下した歌を返している。

このような作法にてらせば、ここで玉鬘は自らが梅の花によそえられたことそのものに対して、何らかの謙遜の姿勢を示すべきであろう。

以上のことを確認した上で、改めて「かばかりは…」詠を読むと、「花の枝に立ち並ぶべきにほひなくとも」に、「よそえられた梅の花に立ち並ぶような美しさはなくても」という、作法になつた謙遜が示されていることに気づく。

諸注の解釈は、「梅の花」「花の枝」そのものには特に注意を払わず、一気に寓意を読み取ろうとしている点で問題がある。また、その結果として、この歌から、「ほかの後宮の方々の美し

さに肩を並べるべくもない私ではございますが」（集成）というような立ち入った謙遜を読み取るのは、この歌が詠まれる以前に示されている、次のような玉鬘の懸念と大きく齟齬をきたしている。

・をかしきさまをも見えたてまつらじ、むつかしき世の癖なり  
けりと思ふに、まめだちてさぶらひたまへば、  
・みづからも、似げなきことも出で来ぬべき身なりけりと心憂  
きに、

右の引用には、帝に惹かれながらも、親しくなりすぎないように警戒する思いや、すでに髭黒の妻となっていることへの配慮が表れている。その玉鬘が、自らと他の女御・更衣たちの優劣という、冷泉帝の贈歌にも全く触れられていない話題を、自分から不用意に口にするはずはない。

冷泉帝が当該歌を返されて、「さすがにかけ離れぬけはひを、あはれと思ひつつ」というように、一定のしかるべき距離を保ちながらも、便りだけは受け取りたいという玉鬘の思いを読み取ったというのも、以上に述べた解釈に適合するものと考ええる。

## 五

ありつる御手習どもの、散りたるを御覧じつけて、うちしほ  
たれたまふ。「この水の心尋ねまほしけれど、翁は言忘して」  
とのたまふ。

そのかみの老木はむべも朽ちぬらむ植ゑし小松も苔生ひ  
にけり  
（藤裏葉巻）



夕霧・雲居雁夫妻が住む故大宮の三条邸を訪れた太政大臣は、「老木」と「小松」を対比させ、後者に苔が生えたのだから、前者が朽ちるのも無理はないと詠ずる。この歌についての諸注の解釈は、「老木」「小松」の寓意をめぐって、次のように見解が分かれている。

〔老木〕故大宮、小松〕太政大臣〕（全書・大系・玉上評釈も）

・その昔の老木は朽ちてしまっているだろうが、無理もないことだ。そのころ植えた小松も年を経て苔が生えてしまったのだから―子供であつたわたしもこの年になってしまふほど年月が流れてしまった。

（新編全集）

・「老木」は故大宮、「小松」は大臣。なお一説では大臣、夕霧夫妻の対照とするが、「朽ち」を死の意と解す前者に従う。「言忌」しつとも、亡き大宮をしのびながら歳月の流れへの感無量を詠みこんだ歌である。

（同・頭注）

〔老木〕太政大臣（夫妻、小松〕夕霧夫妻〕

・昔の老木が朽ちてしまったのも当然だろう。その頃植えた小松が苔むすまでに生長したのだから。「老い木」を致仕大臣夫妻、「小松」を夕霧夫妻にたとえる。

（新大系）

〔老木〕不明、小松〕夕霧夫妻〕

・昔の老木はなるほど朽ちてしまつたでもありません。その当時植えた小松も苔が生えるほどになったのですから。「植えし小松も」は、ここに新たに居を構えた若い二人に対する祝意。

（集成）

右に示した三とおりの解釈に加え、鑑賞と基礎知識は独自の見

解を次のように述べている。

松に託して世代の交代を詠んでいることはまちがいないが、①「老木」を故大宮、「小松」を太政大臣とする説と、②「老木」を太政大臣、「小松」を雲居雁・夕霧夫妻とする説とに大きく分かれる。

①説は、「朽ち」が大宮の死を表すと解することによるが、直前の「言忌して」と齟齬するようであり、太政大臣が大宮の死と自身の老成をいうだけではこの場にふさわしい祝意にかける。その点で②説の方がよいようだが、やはり「朽ち」に死を読む解釈も捨てがたい。

そこで折衷案的ではあるが、③「老木」を故大宮、「小松」を雲居雁・夕霧夫妻とみてはいかがか。これであれば、「むべ」と夫婦の贈答歌に触発された和歌として適している上、二人への祝意も込められていることになる。

以上のように解釈が多岐に分かれるのは、「老木」「小松」の寓意ならびにその組み合わせが、どのように解してもすっきりしないためであろう。以下、しかるべき読みに到達するために、作者・読者が当時共有していたはずの常識を推定しながら、「老木」「小松」のそれぞれについてそれが誰を寓意するのか、そもそも人を寓意しているのかについて、検討を加えていこう。

○「老木はむべも朽ちぬらむ」について

「朽つ」という動詞は、確かに人の死を意味することがある。けれども、それは自らの死について言うのがふつうであり、太政大臣が母大宮の死についてこの言葉を用いるのは、いかにも礼を

失しているだろう。

・親もあり、知るべき人もある身ならば、かかるところに、かりにても独りはありや。やがてこの住処に朽ちぬべきよりほかの行方もなくなむ。  
(うつほ物語・俊蔭卷)

・いとうれしきことなれど、世に似ぬさまにて、何かは。かうながらこそ朽ちも亡せめとなむ思ひはべる。  
(蓬生卷)

右の二例のうち、うつほ物語の引用は、俊蔭女が自らの死に言及した述懐、源氏物語の引用は、末摘花が同じく自らの死について述べたものである。

また、「ぬらむ」という言い方についても検討の必要がある。  
・雲もなく和ぎたる朝の我なれやいとはれてのみ世をば経ぬらむ  
(古今集・恋五・七五三・紀友則)

・命長かるべしとのみのたまへど、見はてたてまつりてむとのみ思ひつつありつるを、かぎりにもやなりぬらむ、あやしく心細きこちのすればなむ。  
(蜻蛉日記)

・なほ、いと苦しうこそあれ。世や尽きぬらむ。  
(賢木卷)

右の用例から分かるように、「ぬらむ」は、まだ過去になつていない事柄について、「たのだらうか」と推量する言い方である。したがって、すでに三周忌を済ませた大宮の死を「朽ちぬらむ」と言うとは考えられない。

以上を勘案すると、「老木はむべも朽ちぬらむ」の「老木」は太政大臣が自らを比喩したものであり、「朽ちぬらむ」には、私はもう老いて死ぬのであろう、という述懐が込められていると解するのが妥当ということになる。

○「植ゑし小松も苔生ひにけり」について

「植ゑし小松」は、かつて植えた小松という意味であるから、寓意としては雲居雁あるいは夕霧を考えるのが自然な理解であろう。けれども、かつて植えた小松に苔が生えるというのは、相当に長い歳月が経過したことを意味する。

・いもがなはちよにながれむひめしまのこまつがうれにこけむすままでに  
(万葉集・卷二・二二八)

・松も生ひまたもこけむすいはしみづゆくすゑとほくつかへまつらん

(続古今集・七〇二・紀貫之・「朱雀院御時、石清水の臨時祭をはじめておこなはせ給ふとてめされける歌」)

右のように、生えた小松に苔が生すまでの間は、「千代」あるいは「行末遠く」のたとえとなっていて、夕霧夫妻が成長を遂げた年月の比喩としては不自然に思われる。

また、次の歌から確認されるように、松に苔が生すこと自体にも、老いの印象がつきまとう。この意味からも、今は苔が生えたかつての小松を、まだ若い夕霧夫妻の喩として理解するのは妥当とは言えないだろう。

入江なる松は年へて老いにけり枝もみどりも苔むしてみゆ

(続後拾遺集・雑上・九七〇・花山院)

○一首の理解

以上のように、「老木」は太政大臣の比喩として適当だが、「小松」を夕霧夫妻の比喩とは考えにくい。このことから導かれるのは、当該歌において人物を寓意しているのは、「老木」だけだと

いう判断である。

当該歌が詠まれた三条邸の情景は、次のように描かれていた。

前栽どもなど小さき木どもなりしも、いと繁き蔭となり、一  
叢薄も心にまかせて乱れたりける、つくろはせたまふ。

こうした描写から見て、かつて植えた小松に今は苔が生している  
というのは、三条邸の実景として唐突ではないだろう。

・ ひきてうゑし人はむべこそ老いにけれ松のこだかく成りにけ  
るかな

（後撰集・雑一・一一〇七・躬恒・「あはちのまつりごと  
人の任はててのほりまうできてのころ、兼輔朝臣のあは  
たの家にて」）

・ いくとせにかへりきぬらんひきうゑし松の木陰にけふすむ  
かな

（能因法師集・一二二・「京にのほりて、はやううゑし松  
のかげにすずみて詠之」）

右の歌のうち、「ひきてうゑし…」詠では、小松の成長を見て、  
かつてそれを引き植えた人の老いを納得している。また、「いく  
とせに…」詠では、同じくかつて植えた小松の成長によって歲月  
の経過を感じている。

当該歌もまた、小松が成長し苔が生した様子を見ることによつ  
て、自らの老いを納得し、過ぎ去った歲月を思う詠者の感慨を表  
現している。異なるのは、松を植えた詠者の側の思いを直叙せず、  
「老木」の比喩を用いて表現していることである。

従来の解釈の混乱は、その「老木」の比喩に引かれて、「小松」  
も誰かを寓意しているのだらうと決めてかかったことに起因する

だろう。その背景には、表現の意味するところを、遺漏がないよ  
うに突き詰めて理解しようとする考え方があるものと思われる。  
次に示すように、すでに旧注の時代に、そのような考え方を見い  
だすことができる。

・ こといみしてとはの給つれど、かく歌をよみ給也。わかき人  
達成人して我身は老木となれると也。

（細流抄）

・ 閑 心は、昔の老木なればくつるも理ぞと也。すでにうへた  
る小松さへ苔のおひたればとの心なるべし。下の心は、さぞ  
年のよりてみゆらん。夕霧、雲も雁も生長し給ふはとの心也。  
前の詞に翁はこといみしてとあればこの歌はいささか祝てよ  
める也。

（万水一露）

・ 私云、秘に我身の老木となれるとはいかが。聞書二大宮の事  
は順の義の事なればさもくちぬらん、夕霧雲井雁のかやうに  
なり給へるはとの事なるべし。只今を祝して也と云々。然べ  
き歟。

（岷江入楚）

和歌の表現は、必ずしも細部に至るまで整合的に組み立てられ  
ているとは限らない。「老木」と「小松」が一对のものとして示  
されているのに、片方は人物を寓意していて、片方はそうでない  
というのは、いかにもすつきりしない。けれども、その苔生した  
かつての小松も、単なる景であるわけではなく、三条邸に流れた  
長い歲月の経過を暗示しており、また、夕霧夫妻の新居を寿ぐ意  
味合いも帯びている。そうした一首の表現・構成にすなおに沿っ  
て読解を行うことが、ここで求められているのである。

注

(1) 『源氏物語』の引用は、『新編日本古典文学全集』（以下「新編全集」と略称する）により、一部表記を改めた。他の諸注釈書に言及する場合は、以下の略称を用いる。「全書」「日本古典全書」「大系（『日本古典文学大系』）」「玉上評釈（『玉上琢彌「源氏物語評釈」』集成）（『新潮日本古典集成』）」「新大系（『新日本古典文学大系』）」「鑑賞と基礎知識」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識』）。

(2) 『源氏物語』の和歌を読む（九）（『立教大学大学院日本文学論叢』一八号、二〇一八年一〇月）

(3) この見解を示すにあたり、私は、過去の和歌の用例を引用し、それを根拠として論を進めたが、その際、言及すべき先行研究を見落としていた。それは、北村季吟『源氏物語湖月抄』の師説（箕形如庵の説）である。今、講談社学術文庫に復刻された増註版（有川武彦氏校訂）により、当該箇所を引用する。

師 此歌の表の心は、同じ枝を青と紅に分ちたる、山姫にそまらぬ色や深き、又染れる色やふかきと、とはばやと也。  
下の心は、連枝の中に中君を分けて、我にゆづり給ふおほいぎみに、我中君にうつるか、大君へ深きになるべきか、うつらぬか、我心の深きならんか問ひたきと也。兎にもかくにも姉君に心はなれねば、姉君に浅からぬ心を見えまほしき心なるべし。前にもうちつけに浅かりけりともおぼえ奉らじといへり。是も中君にうつらば、浅き心と遠慮せし心あるにや。

右の本文の中で、傍線を施した「下の心は」以下の記述については、清濁の別を次のように正す必要がある。

下の心は、連枝の中に中君を分けて、我にゆづり給ふおほ

いぎみに、我中君にうつるが、大君へ深きになるべきか、うつらぬが、我心の深きならんか問ひたきと也。  
右の論述において、師説は、紅葉の枝「染れる色」を「我中君にうつる」こと、青い葉の枝「そまらぬ色」を「我中君に」うつらぬ」こと、というように読み解いている。師説が、そこから論を進めて、いずれにしても大君への深い心ざしが表れていて云々と述べるのには従えないが、寓意の認定は適切である。

(4) 萩原広道『源氏物語評釈』は、

里わかぬとはいづれの里とはいはずなべておしる月の影を云。頭中将のいたらぬ限なくありき給ふの意也。

というように、当該歌の上の句を、頭中将の好色な行動の比喩と解している。評釈は、まず諸注と同様に、当該歌の上の句に、どこでも尋ねて行く男の行動の比喩を見て取った。その上で、そのような望ましくない行動を、源氏が自分自身の行動として言及することはありえないと考え、頭中将の行動を揶揄しているものと考えたのだろう。これは誤読ではあるが、上の句に寓意を読み取る場合の、一つの筋道を示すとともに、その限界を明らかにしているといえる。

(5) 風に比喩を読み取るのは、次のように旧注以来の伝統である。

・此人は、弘徽殿方の人と見えたれば、尋んにつけてさはがしき事も有べき也。名のり給はぬとて問すつべきにてはなきと陳じたる也。……源と右大臣との御中は、風もはげしく露もたまらぬごとくなると也。

（細流抄）

・箋曰、露と云物は風のふかぬ程也。風とは、或は心にもあらですが定る歟、又はこと人のかたらひつく歟也。いかさま尋ぬべき程を、待がたきは露の心也。此いはれにて名のりし給へとは申せしと也。

（岷江入楚）

(6)

旧注・新注の理解は、必ずしも「花の枝」＝女御・更衣という認識で揃ってはいない。

・碩　心はみかどを花のえにたとへ奉て、其花の香に玉鬘の及ぶべき匂ひにてはなけれども、歌などよみかはすほどのたよりはおはしませと也。  
(万水一露)

・立ならび奉るべき匂ひはなくとも風のたよりばかりなどはおぼしめし忘れそといへる歟。いかでかきこゆべきとあるによつてかくいへる歟。  
(岷江入楚)

このように旧注には、「花の枝」を帝の比喩と解する見解が見られる。新注では本居宣長『源氏物語玉の小櫛』が、

……三の句は、女御更衣たちなどをいへるか。又は帝をたとへ奉れるか。

として、両説を併記している。

(かとう　むつみ　本学文学部教授)